

桜さく島

見知らぬ世界

竹久夢二

青空文庫

路みち

あをのほら
青い野原のなかを、白い路みちがながくくつゞいた。

は、あね
母とも姉とも乳母とも、いまはおぼえもない。

をんなかたほ、
おぶさつたその女をんなが泣なくので、私わたしもさそはれてわけはしらずに、ほろく泣ないてゐた。

女の肩かたに頬ほをよせると、キモノの花模様はなもやうが涙なみだのなかに咲さいたり蕾つぼんだりした、白しろい花はなび

ららが芝居しばゐの雪ゆきのやうに青あほい空そらへちらくくと光ひかつては消きえしました。

つげ
黄楊わうやうのさし櫛くしがおちたのかと思おもつたら、それは三ヶ月みかげつきだつた。

くろかみ
黒髪くろかみのかげの根付ねつけの珠たまは、空そらへとんでいつては青あをく光ひかつた。

あかかんざし
また赤あかい簪かんざしのふさは、ゆらくとゆれるたんびに草くさ原はらへおちては狐きつねあふぎ扇あふぎの花はなに化ばけた。

せうねん
少年せうねんの不可思議ふかしぎな夢ゆめは、白しろい路みちをはてしもなく辿たどつた。

死し

花道はなみちのうへにかざしたつくり桜ざくらの間あひだから、涙なみだぐむだカンテラかなづが数かずしれずかゞやいてゐた。
 はやしがすむのをきつかげに、あの世よからひゞいてくるかとおもはれるやうなわびしい釣つりりがねの音ねがきこえる。

金きんの小鳥ことりのやうないたいけな姫君ひめぎみは、百ひやく日にち鬢かつらの山賊さんぞくがふりかざした刃やいばの下したに手てをあはせて、絶たえいる声こえにこの世よの暇いとま乞こひをするのであつた。

「南無阿弥陀仏」

きらりと光ひかる金属きんぞくのもとに、黒髪くろかみうつくしい襟えり足あしががっくりとまへにうちのめつた。
 血汐ちしほのしたゝる生首なまくびをひっさげた山賊さんぞくは、黒くろい口くちをゆがめてからくからと打笑うちわらつ

た。

あ、お姫様は斬られたのか。

それは少年のためには「死の最初の発見」であつた。

もう姫君は死んだのだ、死んでしまへば、もうこの世で花も、鳥も、歌も、再びきくこ

ともみることできないのだ。

涙は少年の胸をこみあげこみあげ頬をながれた。

「死顔」も「黒き笑も」涙にとけて、カンテラの光のなかへぎらぎらときえていつた、

舞台も棧敷も金色の波のなかにたゞよふた。

その時、黒装束に覆面した怪物が澤村路之助丈えと染めぬいた幕の裏からあらは

れいで、赤い毛布をたれて、姫君の死骸をば金泥の襖のうらへと掃いていつてしまつ

た。

死んだのではない、死んだのではない、あれは芝居といふものだど母は涙をふいてくれた。

さうして少年のやぶれた心はつくのはれたけれど、舞台のうへで姫君のきられたとい

ふことは忘れられない記憶であつた。また赤毛布の裡をば、死んだ姫君が歩いたのも、

不可思議な発見であつた。

傀儡師くわいらいし

………大阪おほさかをたちのいても、わたしが姿眼すがあに

たてば、借行輿かりかごに日ひをおくり………

くちきみせん
口三味線の浄瑠璃じやうるりが庭にはの飛石とびいしづたひにちかづいてくるのを、すぐ私わたしどもはきつけました。五十三次つぎの絵双六ゑすいごくをなげだして、障子しやうじを細目ほそめにあけた姉の袂あねたもとのしたからそつと外面とのもをみました。

四十あしばかりの漢をとこでした、頭あたまには浅黄あさぎのツキンをかぶり、身みには墨染すみぞめのキモノをつけ、手ても足あしもカウカケにつゝんでゐました、その眼めは、遠とほい国の藍あをい海うみをおもはせるやうにかゝ

やいてゐました。棒ぼうのさきには、鎧よろいをきたサムライや、赤あかい振袖ふりそでをきたオイランがだ
りと首くびも手てをたれてゐました。

漢をじこは自分じぶんのかたる浄瑠璃じやうるりに、さも情じやうがうつつたやうな身振みぶりをして人形にんぎやうをつかつて
ました。

赤あかしい襦かけをきた人形にんぎやうは、白しろい手拭てぬぐひのしたに黒くろい眸ひとみをみひらいて、遠とほくきた旅たびをおもひ
やるやうに顔かほをふりあげました。

……………奈良ならの旅籠はたごや三輪みわの茶屋ちやや……………

五日か、三日夜かよをあかし……………

と指ゆびおりかぞえ

……………二十日はつかあまりに四十両りやう、つかひはたし

て二歩ふのこる、金かねゆへ大事だいじの忠兵衛ちゆうべえさ

ん……………

といつて、傍かたはらに首くびをたれた忠兵衛ちゆうべえをみやつたガラスの眼めには泪なみだがあるのかとおもはれ
ました。

……………科人とがにんにしたもわたしから、さぞにくかろう

お腹もたとう……………

思ひせまつて梅川は、袖をだいてよろ／＼よろ、私の方へよろめいて、はつと踏みとまつて、手をあげた時、白い指がかちりと鳴つたのです。
 私は泣きながら奥へはしりこみました。

あはのなるとじゆんれいうた
阿波鳴門順礼歌

ふる里をはる／＼

こゝに紀三井寺

はなみやこちか
花の都も近くなるらん

「お鶴は死なつるいんですねえ、母様かあさま」

「さいなあ、阿波あはの鳴門なるとをこえて観音様くわんのんさまのお膝許ひざもとへいきやつたといのう」

「でも、お鶴つるはお祖母様ばあさんの手紙てがみを母様かあさまにみせたの」

「さいなあ、お鶴つるの母御はごは、その手紙てがみをお鶴つるの懐ふところからとりだして読みながらよみながらお

泣なやつたといのう」

「母様、お鶴は死んだの」

「なんの、死ぬものぞいの。お鶴は観音様のお膝許へいつたのやがな」

「母様、お鶴はなんて言つて歌つたの」

賽の河原で砂手本

一ツつんでは母のため

二ツつんでは父のため

三千世界の親と子が

死出の旅路をふだらくや

あすの夜たれか添乳せん

「か……母様」

「なあに」

「お……お鶴は死なِينですなえ」

母、

ふたり
二人の少年が泊つた家は、隣村にも名だたる豪家であつた。門のわきには大きな柵の
木が、青い空にそゝりたつてゐた。
私どもは柱や障子の骨の黒ずんだ隔座敷へとほされた。床には棕櫚をかけた軸が掛つて
ゐたのをおぼえてゐる。

「健作の母でございます。学校ではもう常住健作がお世話になりますとてね」
とお母様は言はれて、私の顔をしみて、情ぶかい眸でみられた。
私は眼をふせて、まへにおかれた初霜の皿の模様へ視線をやつてゐました。

「まあ」

と、思ひもかけぬ声におどろいて、私ははつと顔をあげたのです。

お母様は、はしたない行ひをおしつづむやうに

「草之助さんでござんしたか。ま、おほきくおなりやしたことわい、なんぼにおなりやんしたえ」

「十二です」

「まあそんなになりますかいなあ」と夢みる眸をあげて「ようまあ、よつてくださんした」思ひいつてこういはれた言葉に、曾ておもひもしらぬ感激をおぼえて、私はしみ／＼

とよそのおばさんを見ました。齒を黒くそめて眉の青い人で、その眼には泪があつた。

縁側で南天の実をみてゐたら、おばさんはうしろから私の肩を袖で抱いて

「おばあさんもおたつしやですかえ」

ときかれた。

千代紙や江戸絵をお土産にもらつて、明る日、村へかへつてきました。

祭の日が暮れて友達のうちへ泊つた一分始終を祖母に話してきかせました。すると、祖母は眼をみはつて、そのかたは父の最初の「つれあひ」だつたと驚かれました。

この日から、少年のちいさい胸には大きな黒い塊がおかれました。妬ましきさにて嬉く、

悲^{かな}しさに^なて^な懐^なしい^い物^{もの}思^{おも}を^おお^ぼえ^そめ^たの^のです。蔵^{くら}の^まへ^のサ^ボテ^ンの^かげ^にか^くれ^ては^わた^しと^おな^しに^眼の^わき^に黒^{くろ}子^のあ^る、^なつ^かし^いそ^の人^のこ^とを、^人し^れず^思ひ^やる^なら^はせ^とな^つた^のです。で^すが^わた^しは、^その^人が^わた^しの[「]生^うみ^の母^{は、}」^であ^ると^いふ^こと^をた^しか^める^のを^おそ^えま^した。や^つぱ^りよ^その^おば^さん^です。私^は、さ^う思^つて^るね^ばな^りま^せん^でし^た。

まど
窓のムスメ

ちうまど
中窓の欄干にもたれて雨だれをみてゐるムスメがあつた。

かたあげ
肩揚のある羽織には、椿の模様がついてゐた。髪はおたばこぼんにゆつてゐたやうに思はれる。

うつむ
俯向いてゐたゆえ、顔はどんなであつたかそれはわからない。

さみだれ
けれど、五月雨の頃とて、淡青い空気にへだてられたその横顔はほのかに思ひうかぶ。戸外にはカリンの木がうはつて、淡紅の花の香が暗い雨の庭にたちまよふてゐた。

いっつ
それが何時であつたとも、そのムスメが誰であつたとも今は知るよしもない。母にきけど、そんな窓は見たことがないといふ。

姉あねにきけど、そのやうなムスメは知らぬといふ。

その頃ころよんだリイダアなどの絵ゑの女むすめかとおもふけれど、それもたしかでない。

ムスメはつひに俯うつむいたまゝ、いつまでもく私わたしの記憶きおくに青白あをしろい影かげをなげ、灰色はいいろの忘ぼうき

却やくのうへを銀ぎんの雨あめが降りしきる。

炬燵こたつのなか

………お庭にはのまえの亀岡かめをかに

君きみをはじめてみるときは

千代ちよもへぬべき心地こころちして………

美迦野みかのさんは、炬燵布団こたつぶとんの綴糸とぢいとをまるい白しろい指ゆびではじきながら、離室はなれの琴歌ことうたに声こえをあ
はせた。

「あたしね、「黒髪くろかみ」をあげたらこんどは「春雨はるさめ」だわ。いゝわね。はるさめ
………」

「……………」

私はだまつて美迦野さんの鬘えくぼにうつとりとみとれてゐた。

「草之助さうのすけさんてば返事へんじがない、いゝ嫁よめさんでもとつたのかい」

「……………」私は笑つてゐた。

「なぜだまつてるのさ。なにかおこつたの」

「うゝん」

「さ、一がさした」

「二がさした」

「三がさした」

「四がさした」

「五がさした」

「六がさした」

「七がさした」

「蜂はちがさした、ぶんくぶん……………」

「いや、美迦みかさんはあんまりひどくつねるんだものな」

「いたかつて、ごめんなさい」

そう言つて美迦野さんは、あまへたやうにしんなりとしなだれかゝつて

「まあおかあいそうに」

と言つて、赤くなつた私の手を熱い唇でひつたりと吸ひました。布団を眼深かにかぶつた小鳩のやうに臆病な少年はおどくしながらも、女のするがまゝにまかせてゐた。少年は女の顔を見あげるのさえはづかしかつた。

青空文庫情報

底本：「桜さく島 見知らぬ世界」洛陽堂

1912（明治45）年4月24日発行

※近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/>) で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字にあらためました。

※文中の「…」は底本では1文字あたり4点ないしは5点の点線ですが、文字の幅に合わせた「…」で代用しました。

※歴史的仮名遣いから外れたものも、底本通り入力しました。

※促音「っ」の小書きの混在は底本のままとしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2005年8月22日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜さく島

見知らぬ世界

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 竹久夢二

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>